第Ⅳ章　ま　と　め

第１節　古墳時代前期溝跡（SD99）出土の古式土師器について

１．出土状況

古墳時代前期の溝跡は調査区ごとに12区SD99・11区SD99・16区SD99・17区SD9・18区SD4・2区SD9と呼称されているが、同一の遺構である。ここでは最も遺物が出土したSD99を代表させ、この溝跡をSD99と呼ぶこととする。

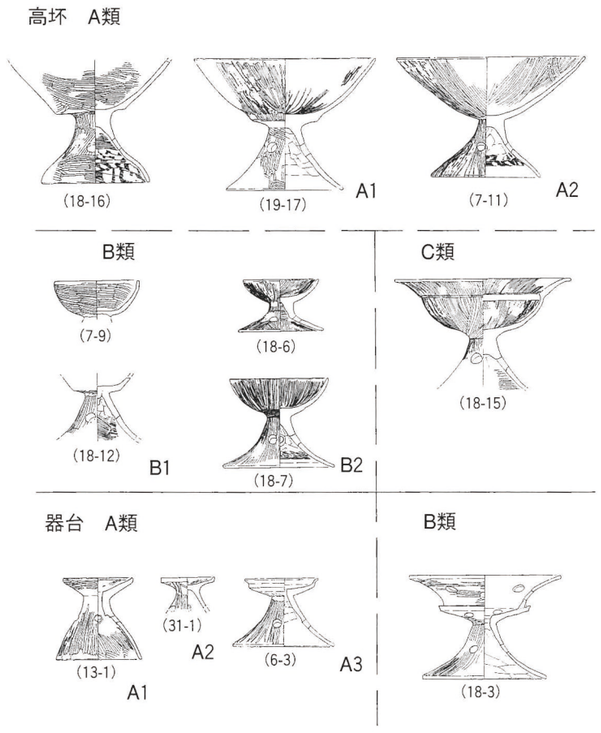
SD99は上幅0.8～1.3m・深さ0.5～0.9mの溝跡で、約320mにわたって確認された。覆土にはAs-CがまばらにみられることからAs-C降下後に掘削されたか、あるいはAs-C降下以前に掘削されAs-C降下後ある程度の時間を経た後に埋没したと考えられる。溝の下層には水が流れた痕跡が認められることから、SD99は大規模な水路と考えられている。

土器は、溝の埋没がかなり進行した段階で投棄されたような状況で出土しており、全体的に散在するのではなく、いくつかの地点に集中するような傾向が窺える。

２．分　　類

ここでは、SD99出土土器を記述するにあたって以下のように分類する（第33～35図）。なお、高坏形土器や器台形土器は「形土器」を省略し、高坏や器台と呼ぶ。甕形土器や壷形土器などについても同様である。

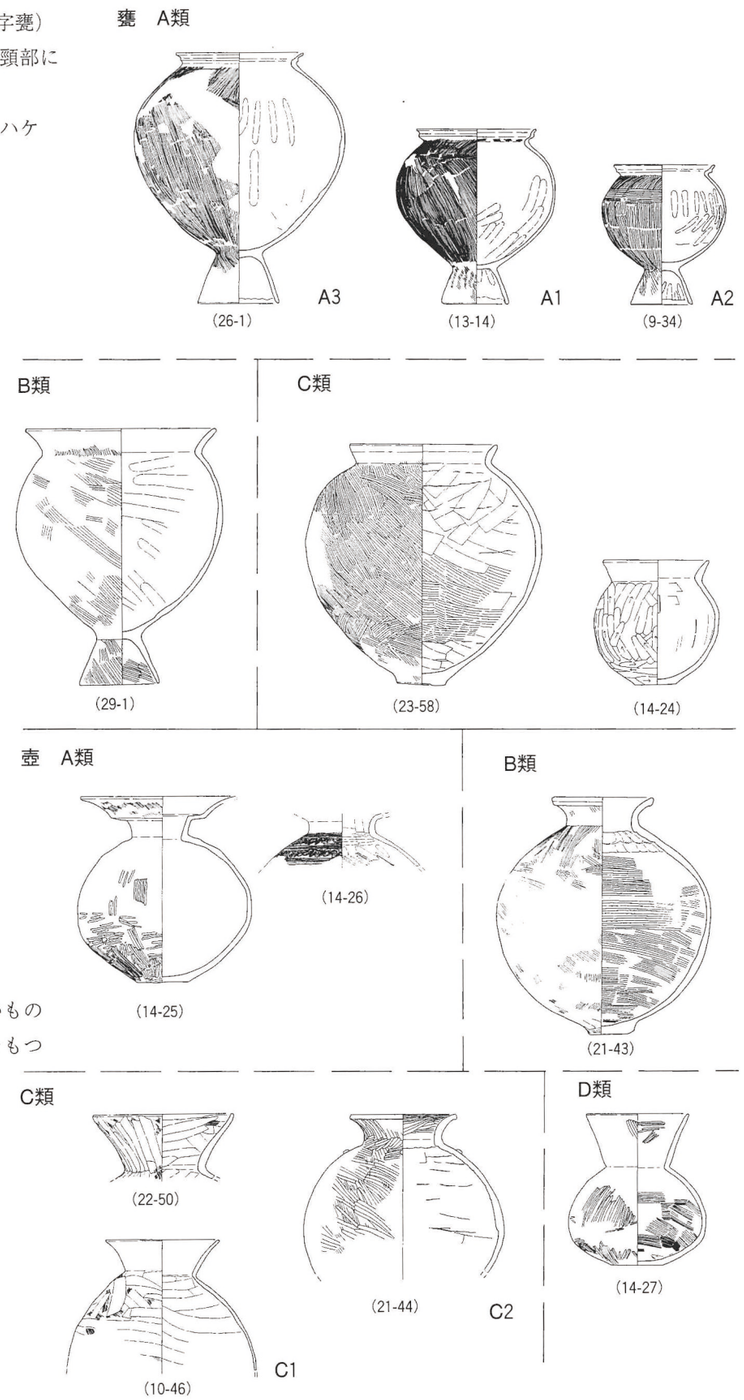
・高坏
　Ａ類　坏部が直線的に立ち上がり、坏部最大径が脚部最大径より大きいもの
　　・A1類　坏部下半に稜があるもの
　　・A2類　坏部下半に稜がないもの
　Ｂ類　坏部が曲線的に立ち上がり、坏部最大径が脚部最大径より小さいもの
　　・B1類　坏部下半に稜があるもの
　　・B2類　坏部下半に稜がないもの
　Ｃ類　坏部に屈曲部をもつもの
・器台
　Ａ類　小型器台
　　・A1類　受け部が直線的に立ち上がるもの
　　・A2類　受け部口縁が直立するもの
　　・A3類　受け部口縁が直立気味に外反するもの
　Ｂ類　結合器台



第33図　土器分類図（１）

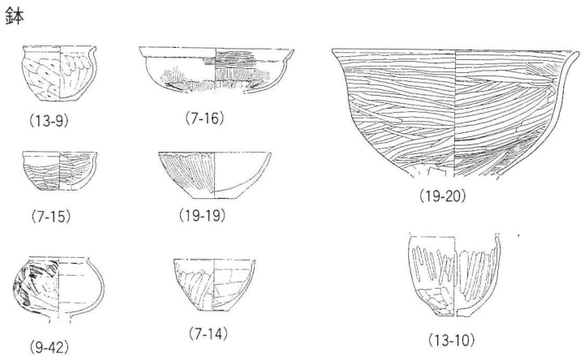
・甕
　Ａ類　Ｓ字口縁台付甕（Ｓ字甕）
　　・A1類　外面肩部と内面頸部にヨコハケ
　　・A2類　外面肩部にヨコハケ
　　・A3類　ヨコハケなし
　Ｂ類　単口縁台付甕
　Ｃ類　単口縁平底甕

・壷
　Ａ類　二重口縁のもの
　Ｂ類　複合口縁のもの（折り返し口縁やその系譜のものを含む。）
　Ｃ類　単口縁のもの
　　・C1類　口縁端部が丸いもの
　　・C2類　口縁端部に面をもつもの
　Ｄ類　細頸壷



第34図　土器分類図（２）

・鉢類　多様性があるが、ここでは細分しないで一括する。



第35図　土器分類図（３）

３．土器各説

各土器の詳細については観察表（表１～８）を作成したので、そちらを参照されたい。

【高坏】

A1類には第７図８（以下、７－８と表記する。）や19－17が、A2類には７－10・11が相当する。B1類は７－７、18－８・12が、B2類は18－６・７・９が相当する。18－16はA1類と同じ系譜に属すると考えられるが、18－16や７－11より古い段階のものであり、廻間Ⅱ式古段階（赤塚1990）のものに類似する。A・B類はともに東海西部系と考えられるが、B2類は他の地域の影響を受けている可能性がある。７－12は樽式にみられる高坏で、内外面が赤彩されている。周辺で弥生後期の遺構がみつかっていることから、混入の可能性もある。

７－11・18－７の杯部内面には、器面がクレーター状に剥離している部分がみられた（写真図版35）。これは小型器台の受部内面にもみられるもので何らかの使用痕と考えられる（註１）。

【器台】

いわゆる小型器台（A類）と結合器台（B類）がみられる。A類は受部口縁の形態からA1～A3類に分類できる。A1類には６－１、13－１・13－３・18－35が、A2類には31－１が、A3類には６－２・６－３・13－２が相当する。口縁部以外の形態をみると、６－１と31－１以外は脚部と受部は貫通している。また、脚部の形態は11－１がやや内湾気味である以外は「八」の字状に裾広がりになっている。

６－１・６－２・13－１・13－２・13－４の受部内面の中心部はクレーター状に器面が剥離している（写真図版35）。こうした器面の剥離は高坏にもみられるもので、何らかの使用痕と考えられる（註２）。

B類には13－７・18－２・18－３が相当する。B類は北陸地方の装飾器台に系譜を求める意見が有力である。受部突出部の端部の形態に相違があり、上方につまみあげられているもの（18－３）と面をもつもの（18－２・13－７）がある。

【甕】

A類はS字甕である。A1類が７点、A2類が31点、A3類が６点みられる。外面の調整に注目してみると、外面肩部のヨコハケには、幅が狭いもの（８－32など）・広いもの（８－24）・２段のもの（８—24）がみられる。刷毛調整の前に篦ケズリをおこなっているものは確認できなかった。刷毛調整が密であるために、篦ケズリの痕跡が消されてしまった可能性もある。内面は、縦方向のユビナデを最終調整とするものがほとんどであるが、刷毛調整の痕跡があるもの（13－13・20－33）や篦ケズリの痕跡があるもの（26－５）が認められた。この他、８—32には体部下半に焼成後の穿孔がみられる。

ほとんどのものには体部や台部に煤の付着や二次加熱の痕跡がみられたが、焼成後の穿孔がある８－32には煤

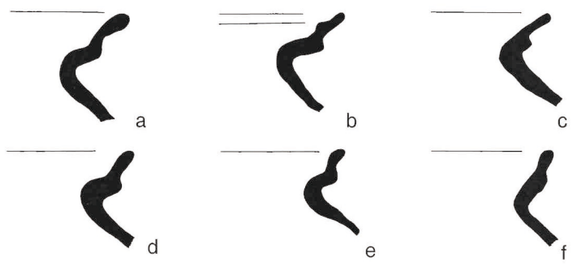
の付着も二次加熱もみられなかった。

次に、形態や大きさについてみていきたい。口縁部の形態には第36図のように多様性がある。ａは上段が大きく外反するもの（８－19）。ｂは上段が大きく外反し、上段内面に稜あるいは面をもつもの（８－24・６－29・８－32など）。ｃは上段が直線的に外反し、内面の屈曲が弱いもの（26－１）。ｄは下段が肥厚しているもの（13－13・19－23・26－４など）。ｅは上段が直立気味に外反するもの（８－30・19－26など）。ｆは屈曲が弱く、全体的に直線的なもの（８－27）である。

ａは赤塚分類C類段階のものに類似する。ｂは赤塚分類B類新段階・C類古段階（廻間Ⅲ式１段階）までみられる口縁内面の面取りに系譜を求められるものである。ｃ～ｆについては、在地化した口縁部形態と考えられる。

体部形態は体部中央付近に最大径があり球形に近いもの（19－23など）、体部中央付近に最大径があるがやや縦長のもの（20－34）、体部上半に最大径があり肩部が張るもの（20－32）がある。口縁部形態と体部形態の相関関係は明確ではない。

大きさについては容量を算出した（註３）。結果は表11のとおりである。20－32と26－１は容量がそれぞれ8550cm³と8472cm³であり、特に大型である。それ以下については、完全な規格品ではないため大きさの違いは漸移的であるが、つくりわけがあったと考えられる。表12は容量が算出されている他の遺跡の例と比較したものである（註4）。分類基準の設定の仕方にものよるが、2000cm³未満・2000cm³～3500cm³未満・3500cm³～6000cm³・7000cm³以上の４段階ほどに分類できるだろう。



第36図　S字甕口縁部形態

B類は単口縁台付甕、C類は単口縁平底甕である。B類とC類については台部・底部を欠損しているものがあり、両者を分類できないものが多い。B類は29－1のほかに台部のみのものが４点みられる。確実にC類といえるのは23－58・14－23・14－24である。23－56～59は底部を欠損するものもあるが、形態や調整方法に類似点が多いことから、いずれもC類である可能性が高い。

14－20・14－21・23－60・14－22は口縁端部がつまみあげられるものである。北陸系の影響と考えられる。

図版	番号	口径(cm)	体部径(cm)	体部高(cm)	容量(cm³)
26	2	10.8	14.2	11.1	1019.8
9	34	13	16	13	1666.3
26	4	12	17.4	13.3	2051.6
13	14	15.4	20.5	15.7	2385.6
9	33	13.1	18.5	14.1	2526.4
13	15	15	19.9	14.4	2737.4
26	3	13.1	19.1	15.6	2784.1
20	29	14.1	19.8	15.2	3092.2
20	31	16.4	22	17	3316.2
20	34	13.1	20	18	3659.9
21	38	14.8	22.6	18.2	4567.8
26	1	16.6	27.5	24.3	8472.5
20	32	19	28.2	22.6	8550.5

表11　S字甕の容量（1）

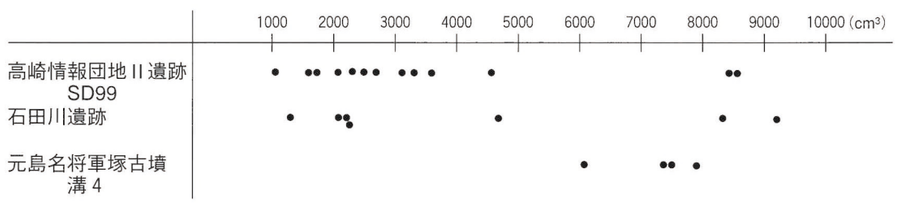


表12　S字甕の容量（2）

【壷】

Ａ類は二重口縁をもつもので、14－25は畿内系、14－26は口縁部を欠損するが東海系の加飾壷である。

Ｂ類には21－43・32－15が相当する。Ｃ類は単口縁の広口壷で、C1類は口縁端部が丸いもので10―46・10－47・10－49・22－50・22－53が、C2類は口縁端部に面をもつもので21－44が相当する。D類は細頸壷で、10－50・14－27・29－２が相当する。

【鉢】

７－15・９－42・13－９は短く屈曲する口縁部をもつものである（川村1993）。７－13・７－14・19－18・19－19は底部から口縁部にかけて屈曲部をもたないものである。７－16は北陸系と考えられる有段口縁鉢である。

４．編年的位置づけ

ここでは、田口一郎氏のS字甕編年（田口1981・2000）を参考にしてSD99出土土器の編年的な位置づけについて検討したい。

SD99ではA1類が７点、A2類が31点、A3類が６点みられた。A1類はおおむね田口分類Ⅱ類に、A2類はⅢ類、A3類はⅣ類に相当し、Ⅱ類はⅠ期～Ⅱ期、Ⅲ類はⅢ期～Ⅳ期、Ⅳ類はⅢ期～Ⅴ期に位置づけられている。Ⅳ類と本遺跡のA3類を比較してみると、A3類にはⅣ-ｃ類のような長胴化はみられないが、Ⅳ-ｂ類と同様に口縁上段内面が窪んでいるものがみられることが分かる。このことから、A3類はⅤ期までは下らないと考えられる。

次にⅡ期の基準資料となっている元島名将軍塚古墳溝４中層（以下、溝４中層）出土のＳ字甕と比較してみると、溝４中層では体部内面が刷毛調整されているものや肩部のヨコハケが頸部直下からあるものがみられるなど、SD99出土土器より古い要素がみられる。

Ⅳ期の基準資料となっている新保田中村前遺跡52号土坑（以下、52号土坑）では、A2類９点・A3類16点で、A1類はみられない。SD99ではA2類が主体なのに対し、52号土坑ではA3類が主体となる。また、52号土坑では外面の刷毛調整が粗いものがみられるなどSD99より新しい要素がみられる。

以上のことから、SD99出土のＳ字甕は田口編年Ⅲ期を中心とする時期に位置づけられる（註５）。

５．小　　結

SD99出土土器について簡単にまとめておきたい。まず、出土状況であるが、土器は散在するのではなくいくつかの廃棄単位（第５・12・16・17図）がみられた。この廃棄単位を比較してみると次のことが指摘できる。①それぞれの廃棄単位では器種構成に偏りがない。②類似する甕がまとまって出土している。例えば、12区（第５図）ではＳ字甕が４点、11区（第12図）では北陸系の影響がみられる甕が３点、16区（第17図）では形態・調整方法が類似する単口縁（平底）甕が３点出土している。

編年的には、田口氏のＳ字甕編年のⅢ期を中心とする時期に位置づけられる。

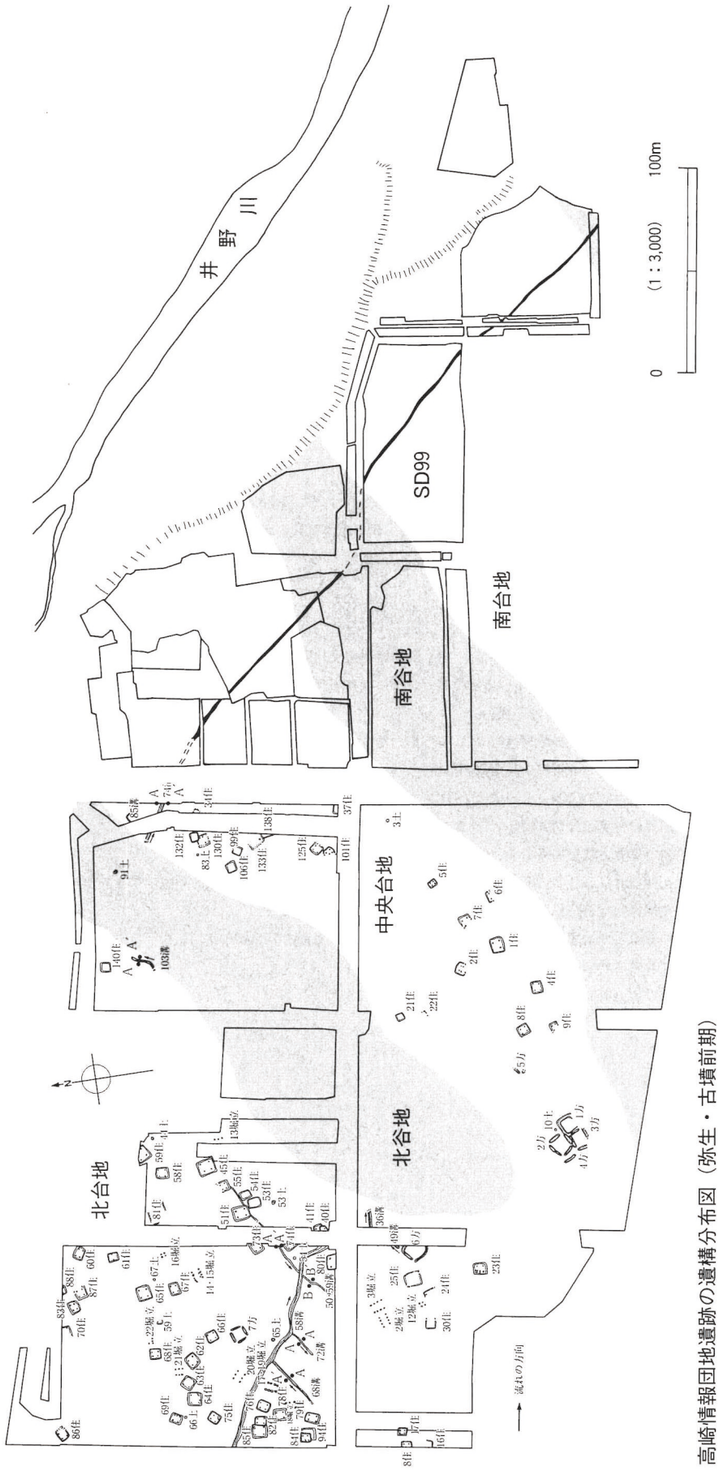
第２節　高崎情報団地遺跡との関連について

ここでは、本遺跡（以下、Ⅱ遺跡）の東側に隣接する高崎情報団地遺跡（以下、Ⅰ遺跡）の関係について簡単にまとめたい。

遺跡地の地形をみると、井野川に直交するかたちで谷が形成されている。北側の谷を北谷地、南側の谷を南谷地と呼び、台地については北側から北台地・中央台地・南台地と呼ぶことにする（第37図）。

Ⅰ遺跡では、古墳時代前期の遺構は竪穴住居跡が約60軒・掘立柱建物跡13棟・土坑８基・溝９条が確認された。北台地と中央台地には北谷地を取り囲むように遺構が分布している。方形周溝墓は弥生時代後期のもので、古墳時代前期の墓域はみつかっていない。

Ⅰ遺跡の58号溝は幅約1.8m・深さ約80cmで、下層にはAs-Cのレンズ状の堆積がみられる。砂粒の堆積もみら



高崎情報団地遺跡の遺構分布図（弥生・古墳前期）
（長井他1997より転載、一部加筆）

第37図　高崎情報団地遺跡との関連

れることから、As-C降下以前に掘削され、その後も機能していたと考えられている。36号溝とは同一の遺構であると考えられ、中央台地には続いていないことから北低地に水を流していたと推測される。40・41号住居跡の手前で南に大きく方向を変えているのは、これらの遺構を避けたためだろうか。

58号溝からは土器が多数出土している。出土層位はAs-C堆積層の上層であり、比較的完形に近いものがまとまって出土していることから、As-C降下後に投棄されたものと考えられている。

Ⅱ遺跡SD99は、Ⅰ遺跡74号溝と同一の遺構と考えられ、58号溝と同様に土器がまとまって出土している。土器については第１節で述べたとおりである。74号溝では、甕A2類１点・A3類１点、柱状脚高坏１点などが出土している。SD99と58号溝の時間的な関係については、土層の堆積状況からみるとSD99の廃絶時期は58号溝のそれより、やや新しいと考えられる。

註

(1) こうした剥離は、石田川遺跡出土の高坏や器台でも確認された（小泉・飯島2000）。

(2) 註1に同じ。

(3) 頸部が最も狭くなっている部分から底面までの容量を計測した。方法は、高さ１mmの円柱が累積したものと仮定し、実測図（等倍）から計測した。小泉・飯島1998と同じ方法である。

(4) 元島名将軍塚古墳の報告（田口他1981）では計測方法は明示されていないが、石田川遺跡や本遺跡の結果と大きな差はないと判断した。

(5) Ⅲ期を中心とするが、Ⅱ～Ⅳ期にわたる可能性もある。しかし、例えば高橋氏の編年案（高橋1997）に従うならば、それほど時間幅を考える必要はないと思われる。Ｓ字甕の編年については今後の課題としたい。

主要参考文献

相京建史・小島敦子ほか　1993　『新保田中村前遺跡Ⅲ』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第151集

赤塚次郎　1990　「Ⅴ　考察」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集

川村浩司　1993　「小型短頸鉢形土器考」『博古研究』5

小泉範明・飯島義雄　1998　「石田川式土器の再検討（1）－甕形土器を中心として－」『群馬県立歴史博物館紀要』19

小泉範明・井上昌美・飯島義雄　2000　「石田川式土器の再検討（3）－高坏・器台・鉢形土器を中心として－」『群馬県立歴史博物館紀要』21

高橋浩二　1997　「Ｓ字状口縁台付甕の伝播とその評価」『国家形成期の考古学―大阪大学考古学研究室10周年記念論集―』

田口一郎　1981　「Ｓ字状口縁台付甕の分類と編年」『元島名将軍塚古墳』高崎市文化財調査報告書第22集

田口一郎ほか1981　『元島名将軍塚古墳』高崎市文化財調査報告書第22集

田口一郎　2000　「北関東西部におけるＳ字口縁甕の波及と定着」『Ｓ字甕を考える』第７回東海考古学フォーラム三重大会

長井正欣ほか　1997　『高崎情報団地遺跡』高崎市遺跡調査会文化財調査報告書第55集

原田　幹　1996　「Ｓ字甕の分布と地域型」『鍋と甕そのデザイン』第４回東海考古学フォーラム

比田井克仁　1993　「東国における外来系土器の展開」『翔古論集』

深沢敦仁　1998　「上野における土器の交流と画期」『庄内式土器研究』ⅩⅣ

写　真　図　版

写真図版 1

2 区全景（南東から）　右にみえるのが井野川

写真図版 2

2 区全景（右が北）

16区SD99全景（南東から）

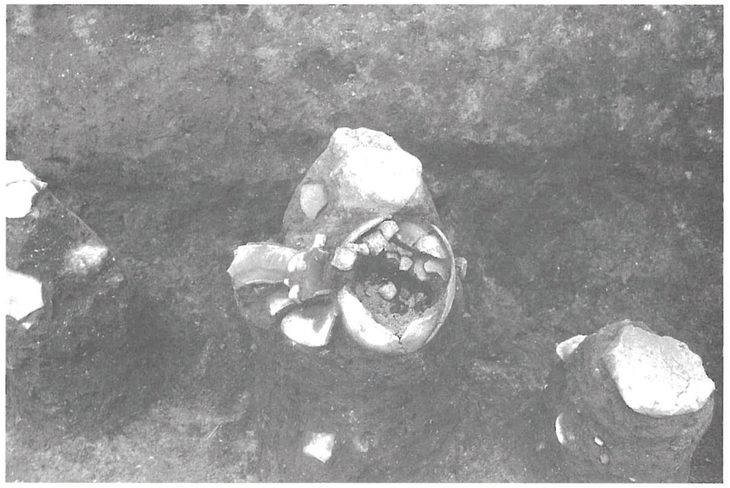
11区SD99
遺物出土状況

11区SD99
遺物出土状況

11区SD99
遺物出土状況

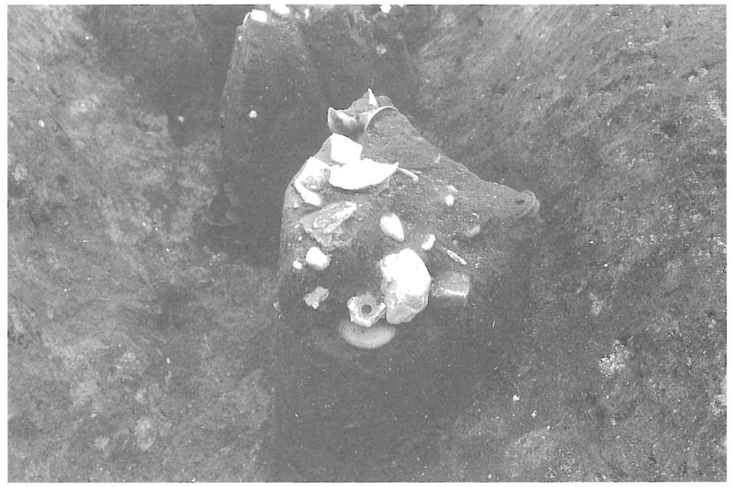
11区SD99
遺物出土状況

11区SD99
遺物出土状況

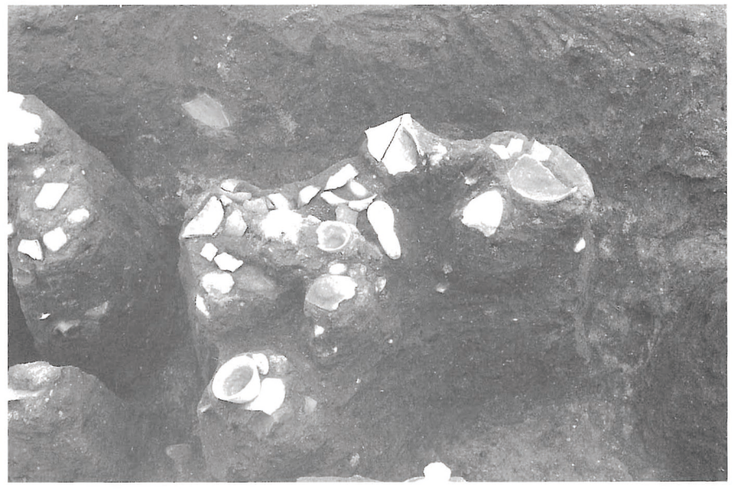


11区SD99
遺物出土状況

11区SD99
遺物出土状況

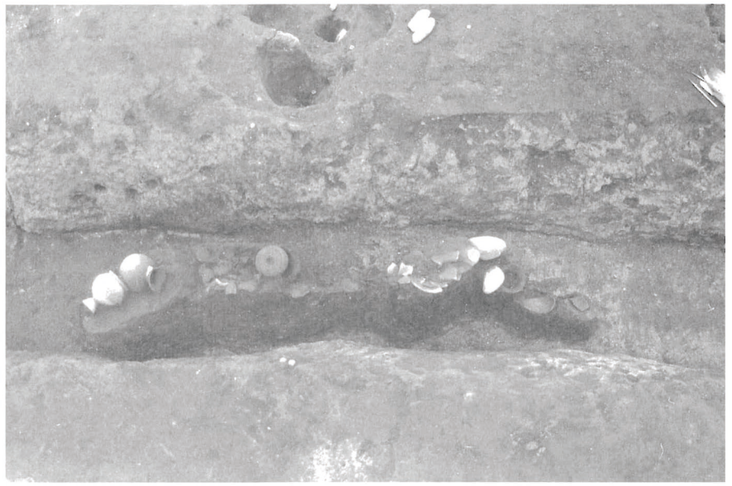


11区SD99
遺物出土状況



12区SD99
遺物出土状況
東から

12区SD99
遺物出土状況
東から



12区SD99
遺物出土状況
東から

12区SD99
遺物出土状況
東から

12区SD99
遺物出土状況
東から

12区SD99
遺物出土状況
東から

16区SD99
遺物出土状況
北から

16区SD99
遺物出土状況
東から

16区SD99
土層断面O－O'

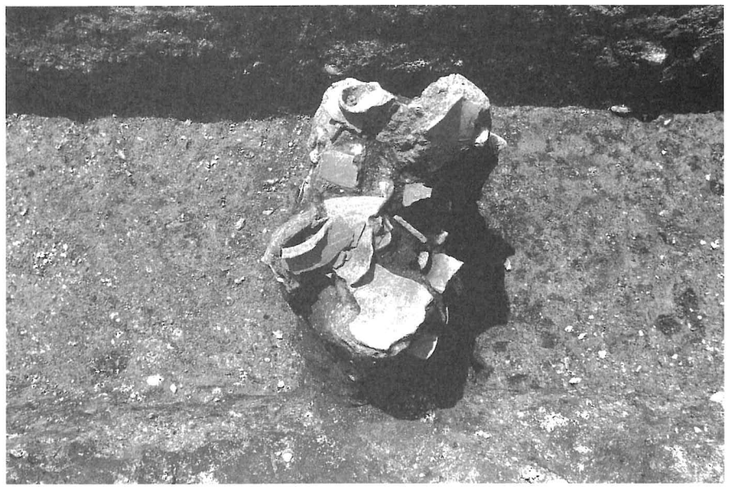
16区SD99
遺物出土状況
東から

16区SD99
遺物出土状況
西から

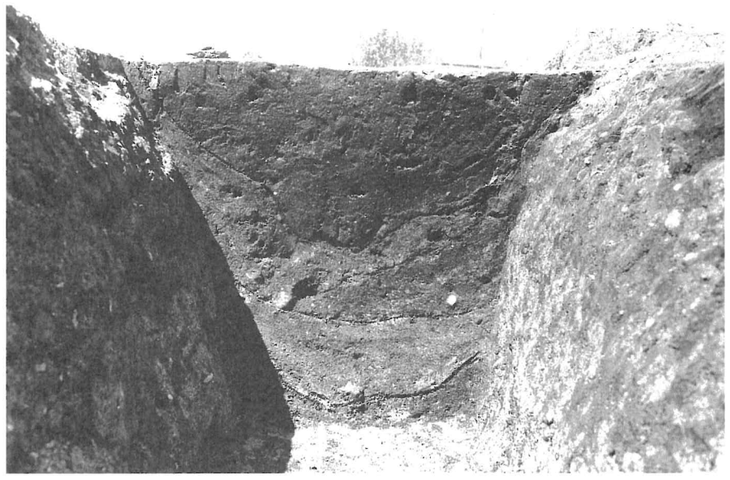
16区SD99
遺物出土状況
南から

16区SD99
土層断面G－G'
北から

16区SD99
遺物出土状況
東から



16区SD99
遺物出土状況
東から

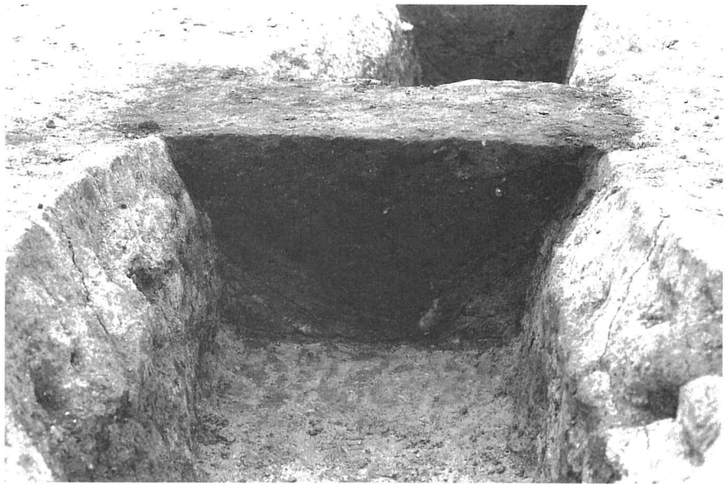


16区SD99
土層断面Ｂ－Ｂ'
南から

18区SD4
土層断面Ｂ－Ｂ'
南から

18区SD4
完掘状況
南から

18区SD4
遺物出土状況
東から



18区SD4
土層断面D－D'
南から

18区SD4
土層断面C－C'
南から

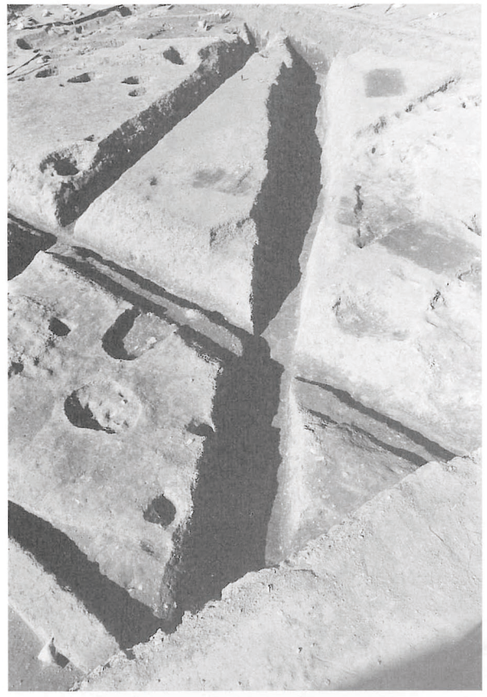
18区
作業風景
南から

16区SD99遺物出土状況　東から

16区SD99遺物出土状況　南東から

16区作業風景　北から

16区SD99完掘状況　南から



11区SD99完掘状況　南から

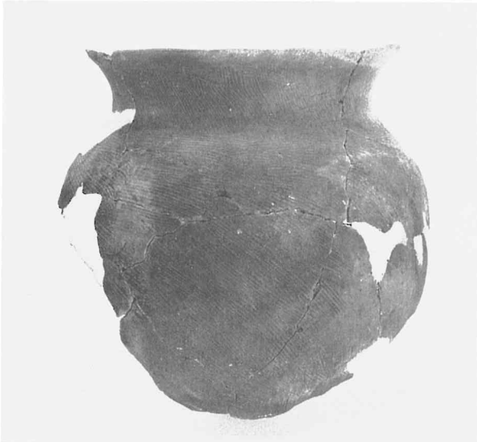
16区SD99遺物出土状況　南から

16区SD99遺物出土状況　南から

16区SD99遺物出土状況　南から

12区SD99　第 8 図32

12区SD99　第 9 図34



12区SD99　第 9 図38

12区SD99　第 9 図39

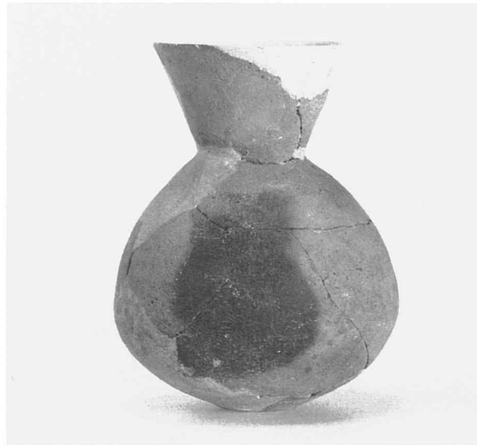
12区SD99　第 9 図43

12区SD99　第10図46

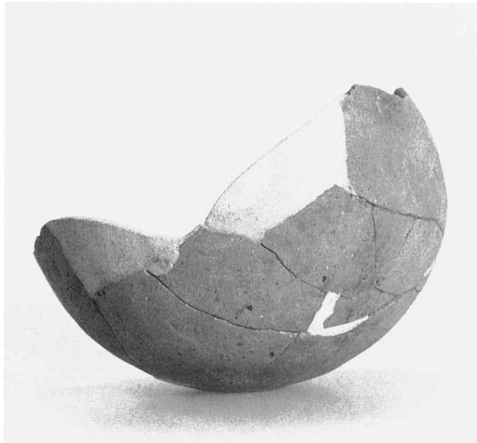
12区SD99　第10図47

12区SD99　第10図48

12区SD99　第10図49



12区SD99　第10図50



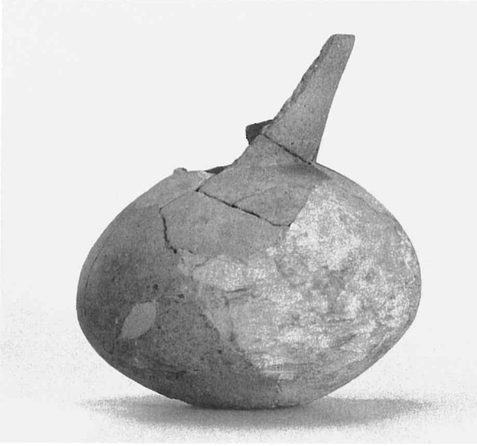
12区SD99　第10図51

11区SD99　第13図 1

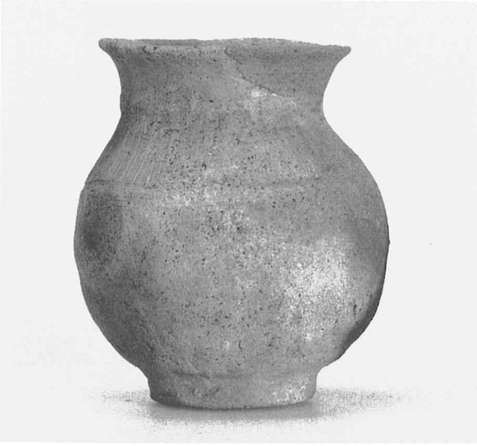
11区SD99　第13図14

11区SD99　第13図15

11区SD99　第14図25



11区SD99　第14図27



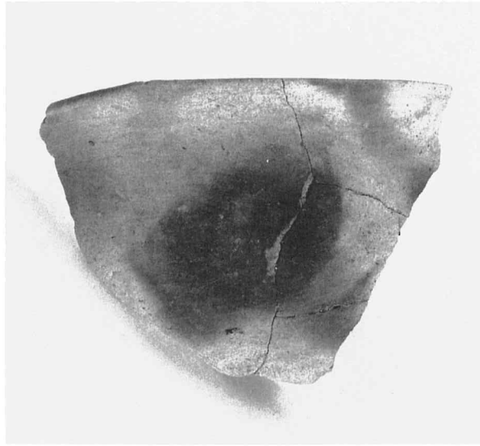
11区SD99　第14図28

16区SD99　第18図 3

16区SD99　第18図 7

16区SD99　第18図16

16区SD99　第19図17



16区SD99　第19図20

16区SD99　第19図28（外面）

16区SD99　第19図28（内面）

16区SD99　第19図23

16区SD99　第19図24

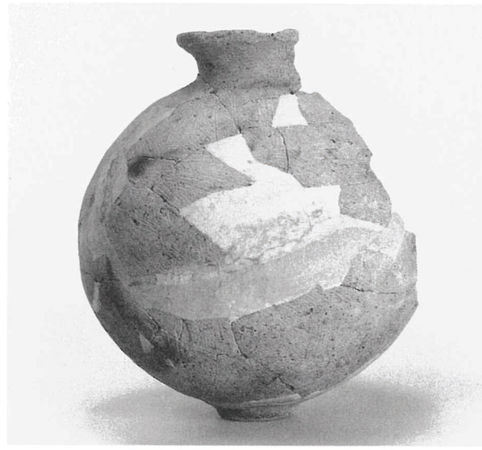
16区SD99　第20図29

16区SD99　第20図31

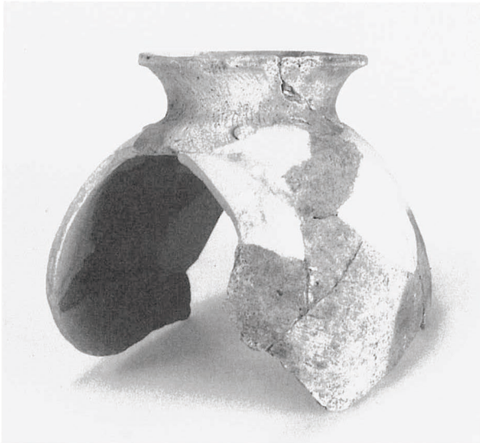
16区SD99　第20図32

16区SD99　第20図34

16区SD99　第21図38

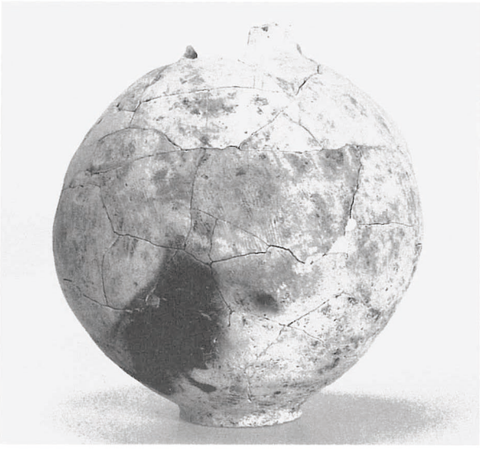


16区SD99　第21図43



16区SD99　第21図44

16区SD99　第21図45



16区SD99　第21図46

16区SD99　第22図47

16区SD99　第22図48

16区SD99　第22図49

16区SD99　第23図56

16区SD99　第23図57

16区SD99　第23図58

16区SD99　第23図59

16区SD99　第23図60

17区SD9　第26図 1

17区SD9　第26図 2

17区SD9　第26図 3

17区SD9　第26図 4

17区SD9　第26図 5

12区SD99　第 6 図 1

12区SD99　第 6 図 2

12区SD99　第 7 図10

12区SD99　第 7 図12

12区SD99　第 7 図13

12区SD99　第 8 図21

12区SD99　第 8 図30

12区SD99　第 9 図40

11区SD99　第13図 4

11区SD99　第13図 5

11区SD99　第13図 9

11区SD99　第13図11

16区SD99　第18図 5

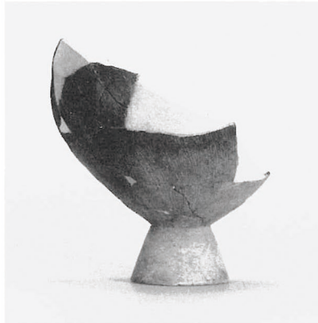
16区SD99　第18図 6

16区SD99　第18図10

16区SD99　第18図12

16区SD99　第18図13

16区SD99　第19図18


16区SD99　第20図30

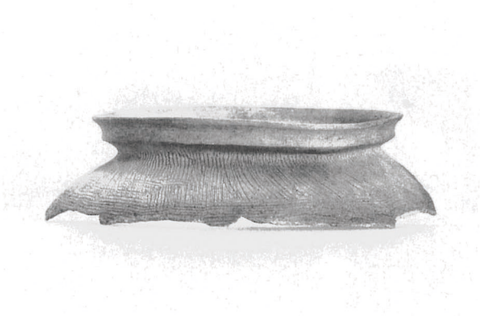
16区SD99　第22図51

16区SD99　第23図64

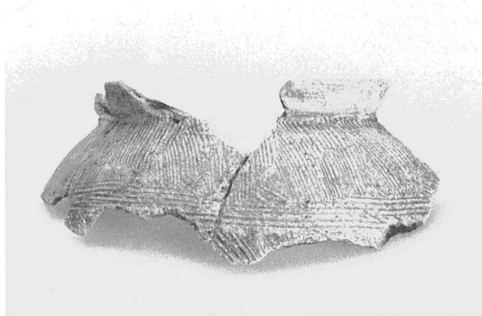
2 区SD9　第29図 2

2 区SD9　第29図 4

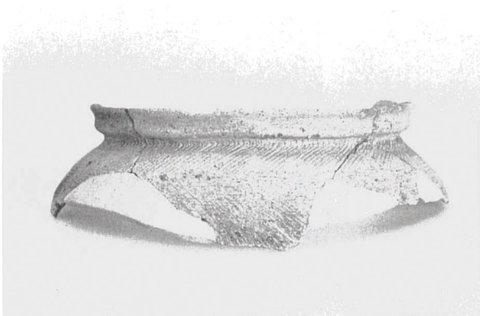
11区SD99　第14図29



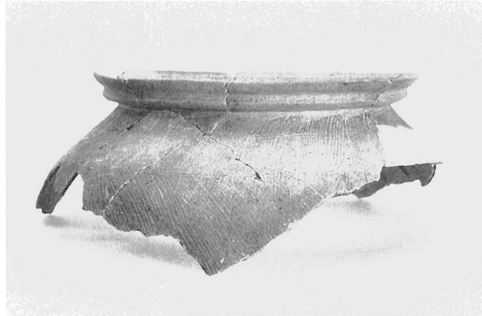
12区SD99　第 8 図20



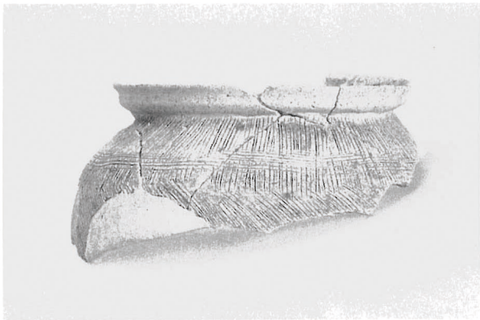
12区SD99　第 8 図22



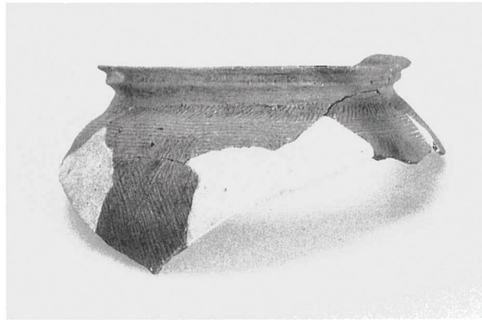
12区SD99　第 8 図23



12区SD99　第 8 図24

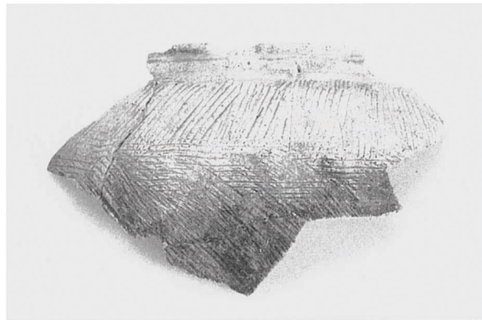


12区SD99　第 8 図25



12区SD99　第 8 図26

12区SD99　第 8 図27

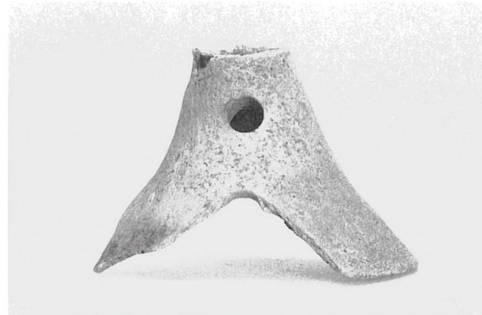


12区SD99　第 8 図29

12区SD99　第 6 図 3

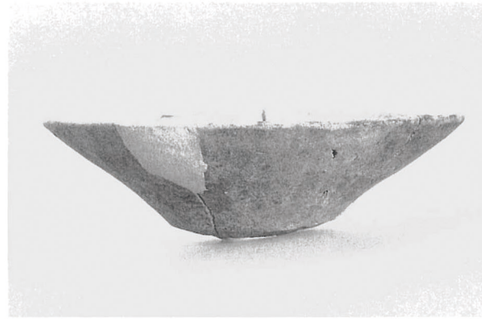
12区SD99　第 7 図 4

12区SD99　第 7 図 5



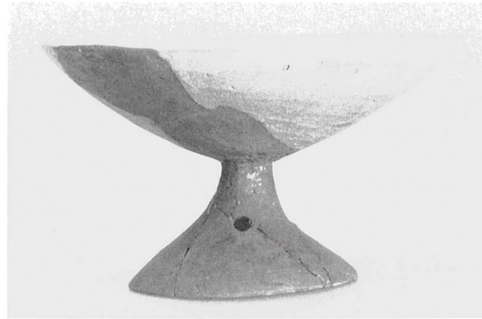
12区SD99　第 7 図 6

12区SD99　第 7 図 7



12区SD99　第 7 図 8

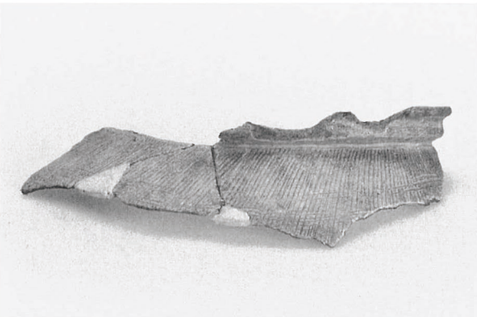
12区SD99　第 7 図 9



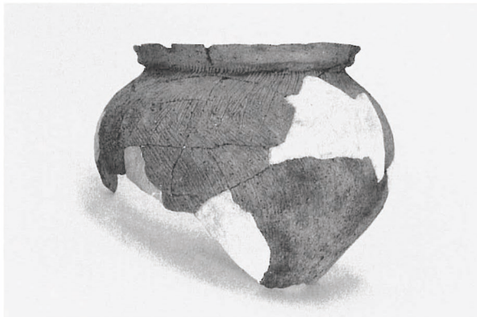
12区SD99　第 7 図11

12区SD99　第 7 図14

12区SD99　第 7 図16



12区SD99　第 8 図19



12区SD99　第 8 図31

12区SD99　第 9 図33

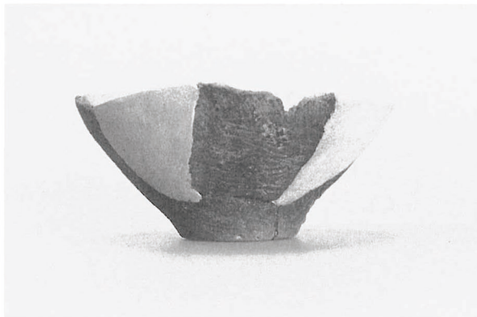
12区SD99　第 9 図37

12区SD99　第 9 図41

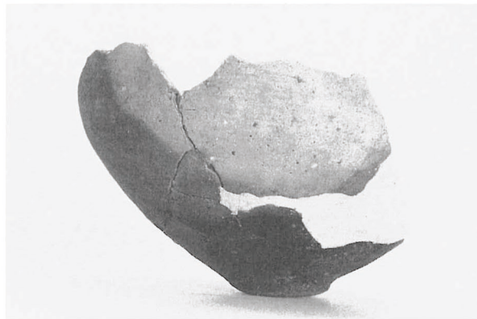
12区SD99　第 9 図42

12区SD99　第 9 図44

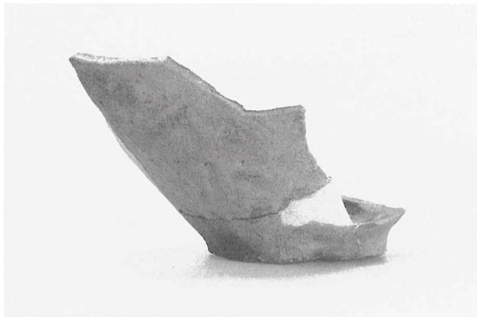
12区SD99　第 9 図45



12区SD99　第10図52



12区SD99　第10図53



12区SD99　第10図54

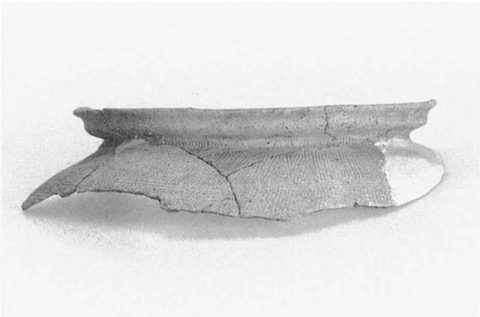
11区SD99　第13図 2

11区SD99　第13図 3

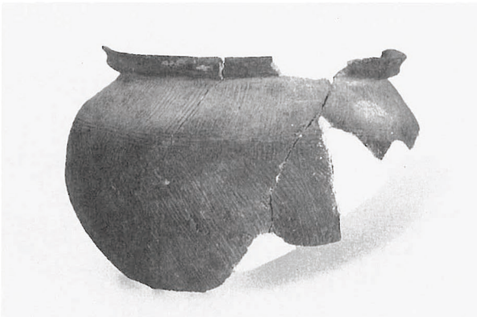
11区SD99　第13図 6

11区SD99　第13図 7

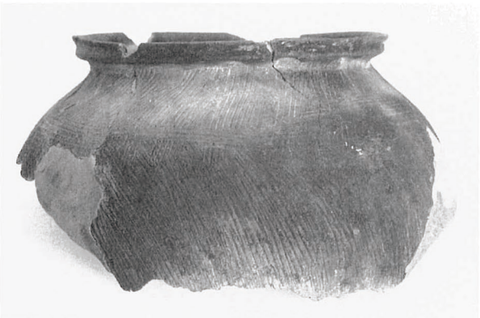
11区SD99　第13図10



11区SD99　第13図12



11区SD99　第13図13



11区SD99　第13図16

11区SD99　第13図18

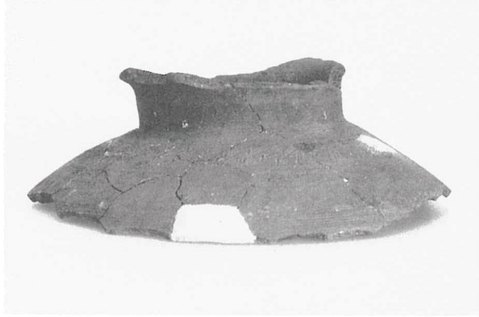
11区SD99　第14図20

11区SD99　第14図21

11区SD99　第14図22

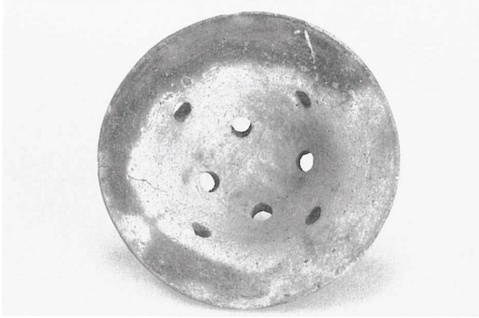
11区SD99　第14図23

11区SD99　第14図24



11区SD99　第14図26

16区SD99　第18図 2



16区SD99　第18図 2

16区SD99　第18図 4

16区SD99　第18図 8

16区SD99　第18図 9

16区SD99　第18図11

16区SD99　第18図14

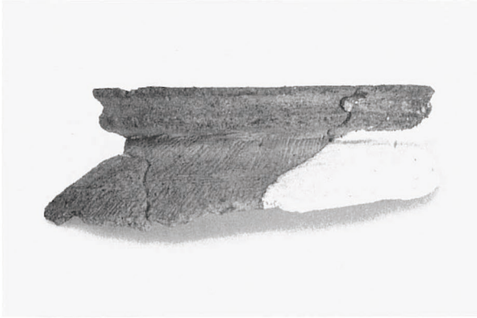
16区SD99　第18図15

16区SD99　第19図19

16区SD99　第19図21

16区SD99　第19図22

16区SD99　第19図22



16区SD99　第19図26

16区SD99　第20図33

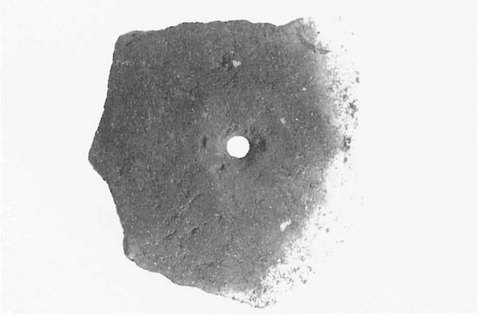
16区SD99　第20図35

16区SD99　第20図36

16区SD99　第21図39

16区SD99　第21図40

16区SD99　第22図54



16区SD99　第22図54

16区SD99　第22図50

16区SD99　第22図53

16区SD99　第22図55

2区SD9　第29図3

17区SD9　第26図6

第13図1　器台受部内面の剥離

第18図7　高坏坏部内面の剥離

第6図2　器台受部内面の剥離

抄　　録

フリガナ	タカサキジョウホウダンチニイセキ
書名	高崎情報団地Ⅱ遺跡
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第177集
編著者名	角田真也（第1分冊）、小泉範明（第2分冊）、関口修（第2、第3分冊）
編集発行機関	高崎市教育委員会　〒370-8501　群馬県高崎市高松町35番地1
発行年月日	西暦2002年3月15日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
タカサキジョウホウ 高崎情報 ダンチ 団地Ⅱ	グンマケンタカサキシ 群馬県高崎市 ナカオルイマチ 中大類町	102020	309	39°19′30″ ～ 39°19′36″	139°03′36″ ～ 139°03′39″	19970418 ～ 19991123	41,577.1 ㎡	高崎情報団地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項
高崎情報団地Ⅱ	集落跡	縄文時代	住居35軒 土坑（埋甕、集石土坑、袋状土坑含む）	縄文土器、石器	草創期～後期（中期中心）
	集落跡	弥生時代	住居4軒	樽式土器 磨製石鏃	
	溝 集落跡	古墳時代 前期	住居13軒、溝	土師器、手捏土器	99号溝から遺物大量に出土
	墳墓 集落跡	古墳時代 中・後期	古墳4基、住居447軒、土坑、溝、掘立柱建物	埴輪、鉄製品、土師器、須恵器、紡錘車、玉類、砥石、土製品、石製模造品	初期須恵器 朝鮮三国系軟質土器
	集落跡 道路跡 墳墓 水田跡	奈良・ 平安時代	住居5軒、掘立柱建物、道路状遺構、土坑、溝、水田	土師器、須恵器、砥石、鉄製品、白磁	道路状遺構（推定東山道） 浅間B軽石下水田
	居館跡 水田跡	中・近世	井戸、土坑、ピット群、溝、水田	軟質陶器、青磁、石臼、板碑	居館址2

高崎情報団地Ⅱ遺跡

高崎市文化財調査報告書第177集

《古墳時代前期溝跡編》

印　　刷　平成14年３月15日

発　　行　平成14年３月15日

編　　集　高崎市教育委員会

高崎市高松町35番地１　TEL 027(321)1111

印　　刷　上武印刷株式会社

高崎市島野町890-25　TEL 027(352)7445

R100